

ふたりの世界が交わる中で

中野 理恵

緻密で見事な構成に唸ってしまった。脚本は塩田明彦監督自身による。

冒頭、制服姿のひとりの女子高生が海岸を散歩している。すると、掘っ建て小屋から男性が出てきて扉を閉める。女子高生がそれを何気なく見ていると、閉められた扉が再び開き、長い髪を無造作に伸ばした女子高生と同世代くらいの女性が出てきて、女子高生をじっと見つめる。すると彼女は、鍵を地面に落とし、その上に靴で土を被せた。散歩していた女子高生が由希で、長い髪の方は麻希だ。

画面は一転して高校の教室になる。続いて誰もいない運動場のベンチで、しかもベンチ一台を隔てて、由希と麻希それぞれが別々のベンチに座り、持参したお弁当を無言で食べるカットになる。この冒頭五分以上の間、セリフが全くない。明るい空と風いだ青い海。雑草が無造作に生い茂る海岸、古ぼけた掘っ建て小屋、そして対照的な雰囲気のある二人の少女。思わず引き込まれてしまう印象的な冒頭である。

海岸を歩いていた由希は高校二年生。重い病を抱えていたためか、明るい海岸風景とはウラハラで将来に希望をもてず、毎日を虚しく過ごしていた。掘っ建て小屋から出てきた荒んだ雰囲気のある長い髪の少女は麻希。ふたりは、実は同じ高校に通う同級生だった。麻希が男性の後に掘っ建て小屋から出てきたことで、由希は「やはり」と麻希について思う。実は麻希は、男性がらみの噂が多かったのである。そんな麻希に由希は、当初は警戒心を抱いていたのだが、周囲の目などを全く気にしない奔放で勝気な麻希を知り、次第に心を開いてゆくのだった。

由希と麻希が親しくなったことに、いち早く気



©SHIMAFILMS

づいてしまった軽音部の祐介は、ふたりを引き離そうとする。彼は、密かに由希に心を寄せていたのだった。ある日、自転車で帰宅する由希を、祐介が自転車で追うと、由希がボーリング場に入っていく。勿論、祐介は由希の後を追いついて、やはりボーリング場に入っていくと、受付には、何と麻希がいたのだった。そんなある日、由希は祐介に向かって、軽音部に入部して、定期演奏会で麻希とふたりでのバンドによる演奏をさせろ、と強い調子で申し入れる。エレキギターを勢いよく弾きながらの麻希の歌は素晴らしかった。そして、いつの間か、祐介はふたりのバンドに協力するようになっていくのだったが…。

冒頭で触れたように監督の力量は半端ではないと思ったが、由希と麻希のダブル主演のふたり、共に2003年生まれの新谷ゆづみと日高麻鈴が、不安定な思春期の少女を見事に演じている。こちらも見事としか言いようがない。

《Cinema Information》

『麻希のいる世界』

日本映画(89分)／監督：塩田明彦／1月29日(土)より渋谷ユーロスペース、新宿武蔵野館ほかにて公開

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。